

今週の為替相場見通し(2023年12月11日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		141.60 ~ 147.50	144.95	142.50 ~ 146.50
ユーロ	(ドル)		1.0724 ~ 1.0895	1.0761	1.0600 ~ 1.0850
(1ユーロ=)	(円)		153.22 ~ 159.80	156.05	152.00 ~ 157.50
英ポンド	(ドル)		1.2504 ~ 1.2724	1.2548	1.2300 ~ 1.2700
(1英ポンド=)	(円)	*	178.67 ~ 186.61	181.91	180.00 ~ 186.00
豪ドル	(ドル)		0.6526 ~ 0.6690	0.6578	0.6500 ~ 0.6750
(1豪ドル=)	(円)	*	93.73 ~ 97.97	95.35	94.50 ~ 97.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1)今週の予想レンジ: 142.50 ~ 146.50 円

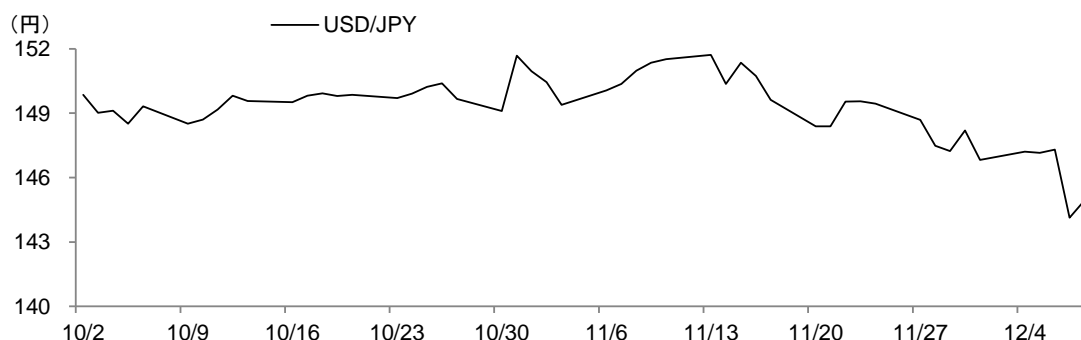
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、日銀の金融引き締め期待の高まりから円が買われ、一時142円を割り込んだ。週初4日、146.38円でオープンしたドル/円は、米金利の持ち直しを受け、146円台半ばでじり高推移。海外時間は、材料に欠ける展開の中、米金利上昇を背景に147円台に乗せた。5日は米金利続落や日本株の下落を受け、147円を割り込んだ。海外時間は、強弱入り混じる米経済指標を受け上下も、米11月ISM非製造業景気指数の強い結果がより材料視され、147円台に乗せる展開となった。6日は材料難の中、上に往って来い。海外時間は、米金利上昇を受け147円台半ばに上昇も、米11月ADP雇用統計や米7~9月期単位人件費(確報)の弱い結果が嫌気され、上値は限定的となった。7日は植田日銀総裁による「年末から来年にかけて一段とチャレンジングな状況になる」との発言を受け、前日の氷見野日銀副総裁の発言も相まって、マイナス金利解除観測の高まりから円金利が急上昇し、円が買われ146円付近に下落。海外時間は、円買い相場が続き一時4か月ぶりの安値となる141.60円に急落後、引けにかけては144円付近に水準を戻した。8日は、東京朝方に下値を試す動きが見られたものの、その後は持ち直し。米11月雇用統計の堅調な結果やその後の米金利上昇を受け144円台後半まで回復し越週。

今週のドル/円は、上値の重い動きを予想。今週は13日のFOMCが注目される。足許では米10月CPIの予想比下振れや軟調な米労働関連指標の結果もあり、市場は24年末時点で▲100bp超の利下げを織り込む。ただし、パウエルFRB議長始めとしたFRB高官は早期の利下げを否定しており、今回合会でもこうしたスタンスは変わらないものと見る。今回公表されるドットチャートが市場予想と乖離して高い政策金利の維持を見通す場合や、パウエルFRB議長の会見で市場の利下げ期待に対し強い牽制が入る場合には、ドルに買い戻しが入ろう。ただし、対円でドルの上昇余地は限定的と見る。先週は、日銀のマイナス金利解除への思惑から一時141円台後半の安値をつけた。植田日銀総裁の「年末から来年にかけて一段とチャレンジングになる」との発言等に反応した形だが、この発言はマイナス金利解除についての具体的な時期に言及した訳ではなく、市場がやや過剰に反応した面も否めない。しかし日銀の真意が掴めない中、来週に控える日銀金融政策会合までは積極的に円を売り進む動きも想定しづらい。日銀関連の報道を受けた乱高下には注意したいところだが、今週のドル/円は144円台を中心とした上値の重い推移を予想する。

(3)先週までの相場の推移

先週(12/4~12/8)の値動き: 安値 141.60 円 高値 147.50 円 終値 144.95 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0850 152.00 ~ 157.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、ハト派的なECB高官発言を受けて売られ、その後も低位で推移した。週初4日、1.08台後半でオープンしたユーロ/ドルは、独10月貿易統計の輸出が予想を下回ったことが嫌気されたことや、先週末ラリーした米金利が巻き戻して上昇したことを背景にドル高となり、1.0804まで下落。その後は米金利上昇が一服したことでユーロ/ドルも小幅に反発した。5日、ECBのシュナーベル理事の「インフレ率が顕著に低下しており、さらなる利上げの公算は小さい」という発言が嫌気され一時1.0804まで下落したものの、ユーロ圏11月PMIが上方修正されたことを受けて買い戻される。その後のNY時間では独金利低下主導で再び売り優勢となり、1.0779まで続落。6日、独10月製造業受注が予想より悪化した結果を受け、1.0775まで売られる。その後は独金利が戻す展開を横目にユーロも買われて1.08前後まで戻すものの、その後はドル買い地合が重しとなりじり安、1.0760まで反落。7日、独10月鉱工業生産が予想を下回ったことに加え、米新規失業保険申請件数が予想一致となりドル買いが強まり1.0760付近まで下落。その後は米短期金利と長期金利が低下する展開に合わせて一時1.0818までドル売りが進む。8日、米11月雇用統計が上振れ、失業率低下と強い内容だったことから先週末から進んでいた分の米国の利下げ織り込みが剥落する展開となり一時1.0724まで売られる。その後は米12月ミシガン大学消費者マインドが改善したことなどで上下に振られて1.0761でクローズ。

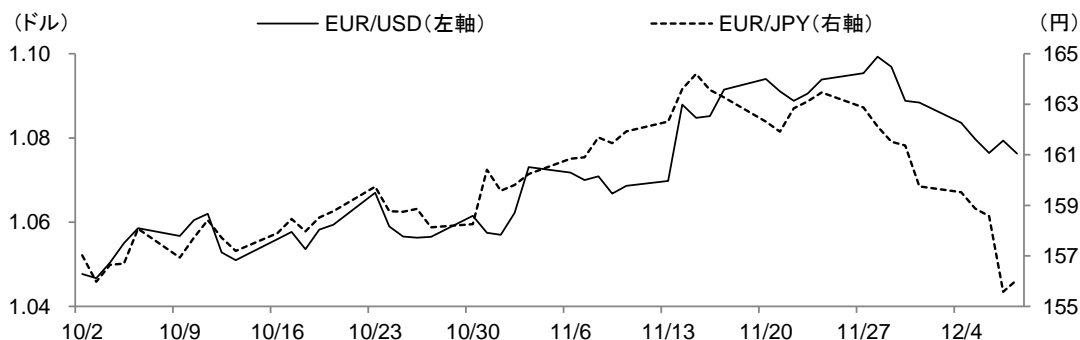
今週のユーロは引き続き軟調な地合いを予想。今週14日(木)にはECBが控えているが、先週シュナーベルECB専務理事がさらなる利上げの可能性は小さいと発言するなど、中央に近いメンバーがハト派的なスタンスを表明しており、金利のパスとしてはここからいつまで現在の水準を維持していくかに焦点が集まっている。市場が織り込む4月までに一回以上の利下げはやや性急に見えるものの、今回発表される経済見通しでは2023年と2024年のインフレ予想が下方修正される可能性が高く、それをもって市場がハト派と捉えると一段と短期金利低下、ユーロ売りに行く可能性がある。ラガルドECB総裁としては利下げをすぐに行うとは考えていないだろうが、市場の期待をプッシュバックさせるほどのタカ派的なメッセージは出にくいと思われる。一方米国でも11月CPIやFOMCが控えており、それらで米国の将来見通しに不安が出た場合でもユーロ圏も同様のシナリオが警戒され、ユーロ高にはなりにくいと考えられる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/4~12/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0724 高値 1.0895 終値 1.0761

(対円) 安値 153.22 高値 159.80 終値 156.05



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2700 180.00 ~ 186.00 円

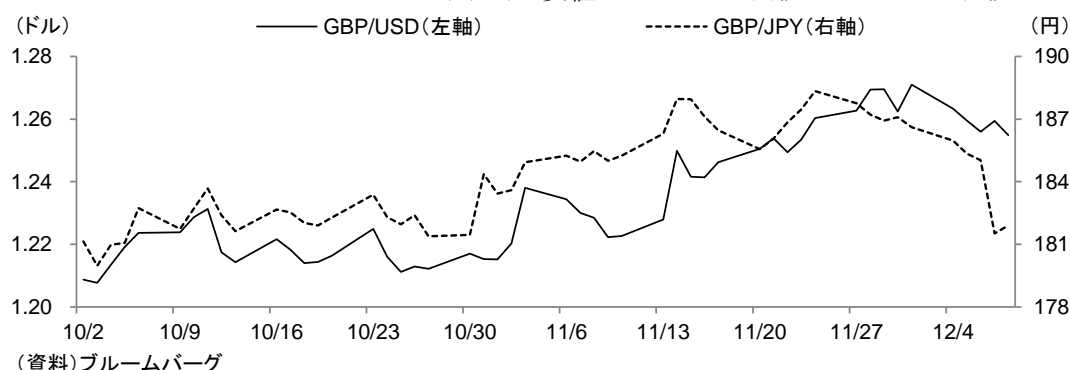
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は、対ドルで下落。11月以降の記録的な上昇をやや縮小する展開となった。12月4日の週初からドルに対するポンドの反落は続いていたが、12月8日に発表された米11月雇用統計では失業率の一段の低下や、賃金上昇率の加速など、米経済の底堅さを示すものであり、市場の米早期利下げ観測が後退した。ポンド/円でも大きな動きがあり、日本銀行の金融政策修正観測の高まりを背景に12月7日にドル/円が一時、147円台から141円台まで一気に下落した際には、ポンド/円も10月初旬以来となる180円割れの水準まで下落した。ポンド/円は11月下旬には188.60円まで上昇し、190円を伺う展開となっていたことを考慮すれば、急激な変化である。理論的には、各国の中銀の金融政策に対する市場の思惑を反映した動きと受け止めるのが妥当であろうが、年末が近づき、流動性が低下するなか、投機的なショートポジションが巻き戻されているようにも感じられる。

今週は12月13日(水)に米国連邦準備制度(Fed)、翌12月14日(木)にイングランド銀行(BOE)及び欧州中央銀行(ECB)の金融政策発表を控える中銀ウィークである。さらには12月12日(火)に米11月CPI、英国でも労働市場関連統計の発表が控えており、中銀の金融政策に関するメッセージや、経済指標を受けて相場が大きく動く展開となるだろう。先週大相場となったドル/円およびポンド円/の動向を見極めるうえでは12月13日(水)発表の日銀短観も注目を集めるだろう。日銀の政策修正観測が高まっている背景には、日本における賃金引上げに向けた機運の高まりがあるが、中小企業を中心に日本企業が持続的な賃上げを行うだけの体力があるかについては懐疑的な見方も根強い。このように、今週は多くの材料が一度に提示される週だが、ポンド相場を中心に考えれば、同日に発表されるBOEとECBの金融政策の相違、ひいてはユーロポンドの値動きが焦点になるだろう。両中銀とも、政策金利の据え置きとなる可能性が高いが、市場の早期利下げ観測をたしなめるメッセージを発する公算が大きい。特に、11月30日発表のユーロ圏11月CPI速報値の下振れや、その後のドイツ出身のシュナーベルECB理事の「ハト派的」発言を受けて、市場は先週、2024年のECB利下げを1.5%織り込むに至っている。GDP、インフレ見通しの下方修正がこうした市場の早期利下げ観測を迫認するシナリオの可能性が全くないわけではないが、基本的には利下げ期待を打ち消す方向でメッセージが発せられる公算が大きいように思われる。一方のBOEに対しても早期利下げ観測は根強いが、市場はBOEの利下げがFRBやECBよりも後ずれすると見込んでいる。ベイリー総裁らBOE高官はここ数週間でタカ派的なメッセージを既に発しており、利下げ期待が後退する余地はECBに比べて相対的に小さいだろう。結論として、今週はユーロに対するポンドの反落を見込むのが短期的な戦略としては与しやすいだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/4~12/8)の値動き: (対ドル) 安値 1.2504 高値 1.2724 終値 1.2548
(対円) 安値 178.67 高値 186.61 終値 181.91



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6750 94.50 ~ 97.50 円

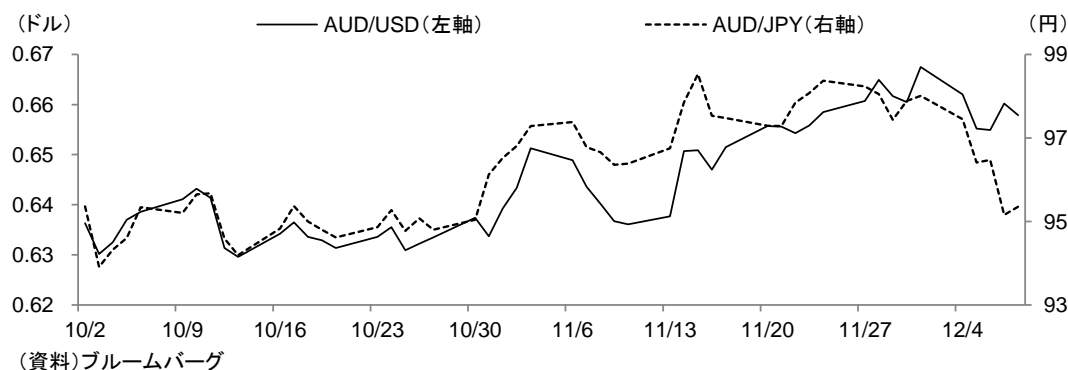
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、中国の信用格付け見通しが引き下げられた影響のほか、RBAの内容がハト派的受け止められたことなどを材料に週を通して見ると下落基調で推移した。週初は前週末に米金利が大きく低下し、豪ドル高の流れとなっていた地合いを引き継ぎ、週を通しての高値である0.6690まで上昇した。上昇基調が一段落するなか、米大手格付け会社による中国に対する信用格付け見通しが伝わりと一転して下落基調となった。加えて、6日に行なわれたRBAでは、市場予想通り政策金利が据え置かれたものの、声明文の内容などからハト派なスタンスが伝わると豪ドル安の流れが強まった。また、公表された豪7～9月期実質GDP成長率(前年同期比)が市場予想を上振れたことを受け、豪ドル安の流れが一段落する場面が見られたものの、市場への影響は限定的であった。しかし、7日に中10月輸出額が市場予想を上回る結果になると、中国景気に対する先行き不透明感が緩和し資源価格が持ち直すなか、豪ドル相場も反発する展開となり、一時0.6620まで豪ドル高が進んだ。その後は、米11月雇用統計において非農業部門雇用者増加数が市場予想を上回り、失業率も低下し米労働市場の底堅さが示されると、ドルが多く通貨に対して上昇したことを受け、豪ドルはドルに対して弱含む値動きとなり0.6570台で週末を迎えた。

今週の豪ドルは底堅い推移を予想する。先週行なわれたRBAでは政策金利の据え置きが決定され、公表された声明文ではハト派なスタンスが表明される内容となった。しかし、豪州の物価上昇圧力の鈍化の流れは米国などと比べると緩やかなスピードでしか進まない公算が大きい。そうした中では、主要国と比べて利下げに踏み切るタイミングが遅れる可能性が市場では意識され、豪ドル高が進みやすい地合いになると見ている。週の前半から半ばにかけては、米11月CPIやFOMCといった注目イベントが重なっており、それぞれの結果によっては、豪ドル相場にも大きな影響を与える可能性があるだけに注意したい。今週の主な経済指標としては12日(火)に豪12月消費者信頼感、豪11月企業信頼感、14日(木)に豪11月失業率などの公表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/4～12/8)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。